



石川 佳純さん
プロフィール

生年月日 1993年2月23日 (22歳) ※2015年3月現在
出身地 山口県出身

山口県やかりの女性を紹介

人財彩時記

卓球選手

いしかわ かすみ
石川 佳純さん

山口市内で、両親共に元卓球選手という環境で育ち、小学一年生で競技を始めた石川さんは、小学六年生で初参戦した全日本選手権で三回戦に進出し、全国的に注目を浴びるようになりました。

高校二年で出場した全国高校総体(インターハイ)では、57年ぶりの一年生チャンピオンとなり、この一年間でインターハイ、国体、選抜、全日本ジュニアなど、4大会を完全制覇という大偉業を達成。

その後、国内の試合で数々の快挙を達成するとともに、世界でもその実力を発揮し、昨年12月に行われた※ITTFワールドツアーファイナルズでは、日本人女子初の優勝を飾り、世界ランキング4位(2015年1月現在)と自己最高位を更新しました。

今年一月に行われた全日本卓球選手権大会では、54大会ぶりのシングルス、ダブルス、ミックスダブルスの3冠を達成するなど、日本女子卓球界の宝として、成長著しい石川佳純さんに電話でお話をお聴きしました。

(取材…2015年1月)※ITTF 国際卓球連盟

山口市から世界へと活躍の場が広がった石川さん、どのような環境で卓球を始められましたか？

小学生の時に卓球を始めました。母の指導の下、本格的な練習を重ね、試合に勝てるようになると、より高いレベルで練習ができるように全日本レベルの選手が集まる大阪の中学校に進学しました。そこで出会った先輩たちの卓球に向き合う姿や、環境の変化は私にとってと

ても大きな刺激となり、いつからか「もっと強くなりたい」、「世界に挑戦したい」と思うようになりました。

ITTFワールドツアーファイナルズでの「日本人女子初の優勝」は私たちにとっても嬉しいニュースでした。どんな思いで挑まれましたか？

どの試合でもそうですが、特別に何かを心がけているということはありませぬ。とにかく勝りたいという気持ちです。どんな相手にも勝ちたいと思えます。

例えば、世界ランキング上位の選手が多い中国では、国を挙げて卓球に取組んでいますし、競技人口が多い分、競い合う環境もとても厳しいものだと思います。そのような人たちに勝つためには、それ以上の練習、そして勝ちたいという気持ちが必要だと思っています。

3冠を達成された今回の全日本選手権大会、戦い方に変化はありましたか？

今大会から、使用するボールがセルロイドからプラスチックに変わったのですが、やはり打つときに違いがあり、多少の違和感があります。しかし、それはどの選手にとっても同じことなので気にはしていません。どのような環境で試合をすることになっても、私はこれまでどおり自分自身の目標に向かって練習

することに集中しています。もっともっと高いレベルを目指して練習をするだけです。

それでは、今後の抱負をお聞かせください。

今は4月の終わりに行われる2015世界卓球選手権蘇州大会に向けて、どのように準備していくか考えているところです。全日本選手権大会を終え、見直すポイントや反省する点が見つかりました。今後はそれをどう克服していくか、そのためにやらなくてはいけないことは何か、勝つためには何が必要なのかを考えています。まずそれをこなし、いくことが目標ですね。

——「心不乱」という言葉がありますが、石川さんは今まさにそれかもしれません。勝つことにこだわり、そのための努力を怠らない強い心が、世界で通用できる一流の選手には必要なことなのかもしれません。人生にこれほどまでに打ち込めることがあるというのは素晴らしいことです。

世界チャンピオンへの道は決して簡単なものではない。しかし、今の石川さんにはその道の先が見えているのかもしれない。だからこそ、今やるべきことに真摯に向き合っている姿はとても輝いています。私たちに希望を与えてくださる石川さんの今後の活躍がますます楽しみです。

「過去～現在～未来…」 働く女性を取り巻く環境と支援

晩婚化、少子化という背景には子育てへの不安もあると言われます。
仕事や自分の夢に向かいながらの子育てに必要なものはなんでしょう。

子育て編



テレビ山口株式会社

アナウンサー 木村 智美さん

子育てママはアナウンサー
“ありがとう”を伝える感謝の心

Q テレビ等、常に誰かに見られているお仕事だと思えますが、なりたいたいと思っただけ、理由などをお聞かせください。

きっかけは高校で放送部に入部したことです。昔から、自分が見つけてきた物や面白いことを学級新聞などで伝えることが好きでしたし、高校一年生の時に初めて聞いた校内放送で、素晴らしい声の先輩(全国大会で優勝するレベル)に衝撃を受け、憧れて入部しました。昼休みには、クイズ番組や音楽番組を放送していたのですが、それがとて

も楽しくて、大学に進学しても放送のサークル活動を続けました。働くなら自分が楽しめて、長く続けられる仕事ができるといいなと思っていました。

Q 出産前と出産後との働き方、生活スタイルの違いなど聞かせてください。

出産前は、職業柄どうしても一般的な休日や時間に関係なく働いていたのですが、復帰後はできる限り土日を休みにし、なるべく保育園を利用できる曜日や時間帯で仕事をするようになりました。

上司は子育て経験のある女性でとても理解があり、家庭も大事にするようにと言われました。職場での理解はとて大きな精神的バックアップになります。

子どもが生まれてからは生活リズムが規則正しくなり、仕事に行く前は自分の身支度に加え、しなければならぬこと(子どもの身支度、食事の準備など)が増え、朝早く起きるようになりました。また、映画鑑賞や、友人や仕事関係などの会合に出かけることが好きでしたが、そのような時間は自然と減っ

ていきました。

Q 子育てと仕事を両立するために、ご自身で工夫されていることを教えてください。

報道部に所属しているため、選挙や、地震などの緊急時には、曜日や時間を問わず出社します。一方、日頃は短い時間でも上手に使うようにしています。以前は残業でしていた仕事を、今は保育園の時間に合わせ、朝早めに出社してこなすこともあります。定時が19時なので、こまごまとした作業は合間でするなど、できるだけ早く帰れるように工夫しています。

本来は何事もきちんとしたいタイプですが、家庭では、多少のことは気にしないようにしています。家事も割り切って作業し、なるべく子どもと向き合う時間をつくるよう心がけています。また、良い意味で「サボる」ようにして、ほんの少しでもいいので自分だけの時間を持つことでストレス解消にもなっています。自分のやりたいことができると、いつか必ず来るのだからと、長い目で考えるようにしています。



写真協力：TBSテレビ山口「スーパー編集局」

Q ご自身の子育て中に、身の回りの支えを感じられたことがありますか？

出産後も仕事を続けられるように、会社が体制を整えてくれているということが、二番有難いことだと感じています。これは仕事を続けたい女性にとってはとても重要なことです。幸いにも私の職場はそれが整っていたので、子供を産む勇氣に繋がりました。社内には育児と仕事を両立させている女性が多く、色々配慮して下さり、悩みを聞いてくれる先輩も多く心強いです。

また、夫の両親が近くに住んでおり、積極的に支援してくれています。これまで義父は育児をする機会があまりなかったと聞いていますが、今は頼りになる「育い(爺)」です。義母はあらゆる面で最強の味方です。

義父母にとっては定年後の楽しみのみ時代でもあるのに、自分達の楽しみだけでなく、私の仕事も応援してくれ、育児の支援もしてくれます。そんな恵まれた環境や、まわりの手助けを「当たり前」と思わず、いつも感謝の気持ちで「ありがとうございませう」と言葉で伝えるようにしています。家族や職場、いつも支援してくださる人たちに本当に感謝しています。

Q 子育てが一段落したら、やってみたいことはありますか？

どうしても、今の生活リズムでは夫のことが後回しになってしまうので、夫の趣味である焼き物の里に一緒に出かけたいと思っています。自分の時間を充実するため友人との交流を図り同世代の人達と話したいですし、いつも支援してくださる人や、お世話になった会社にも仕事で恩返しをしたいです。

(取材：原田浩・藤田)



総合病院
山口赤十字病院
女性診療科 部長 申神 正子 さん

“命の救世主”
生まれくる命と母を支える細腕ドクター

日々自分の顔から笑顔が消えていき、悩んでも相談するところがなく、「立派な臨床医になりたい」という夢や希望も薄れていた頃、先生方の勧めで福山市の開業産婦人科病院にお世話になることになりました。

この病院は、年間千例の分娩を取り扱い、手術例も豊富な第一線の産婦人科病院で、院長先生の一言一句、行動力にも影響されました。毎日全てのカルテをチェックされ、「なぜこの診断をしたのか」「なぜこのよう処置をしたのか」と説明を求められ、臨床医として育てられました。

Q 産婦人科医として「活躍ですが、職業として選ぶことになったきっかけ、理由など経緯について教えてください。

伯母が助産師であったことも影響し、旧島根医科大学(現島根大学)へ進学、大学の医局に入局しました。学生時代に胎児解剖のお手伝いをしていたことから、臨床実習先の医局から勧誘を受け、産婦人科を選択しました。

勤務当初は、昼勤・夜勤が連続する過酷な現場で、あまりのしんどさに考えれば考えるほど将来への不安が大きくなり、

「女性であることを生かせる、そんな産婦人科が好き！」なんて思ってもいなかったのですが、厳しい医療現場では男性と同じように働かなければと必死になっていると、「申神先生、女性でなければできないことを見つけて下さい。頑張るなどは言わなければ、女性ならではの部分に気付いて下さい。」と言われました。この言に目覚め、「女性だからできない」ではなく、「女性だからできること」を自覚し、認めるようになり、素直になることも含めて、新しい自分を発見できました。